幕末の大儒学者

佐藤一斎について

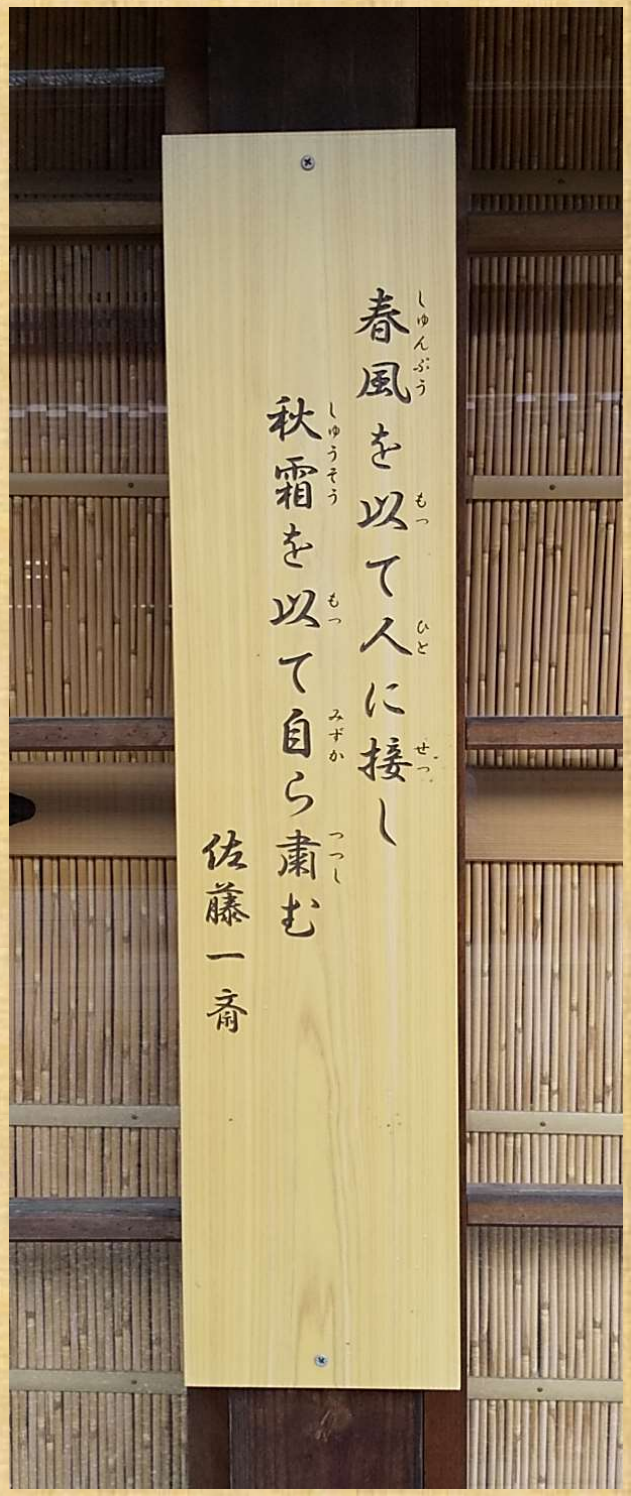
佐藤一斎は、

①坂本龍馬、吉田松陰、勝海舟など幕末の志士の先生の先生で

②昌平坂学問所の塾長（今でいう東京大学の総長）を務めた儒学者である。

岩村藩家老 佐藤信由の二男として江戸下屋敷で安永元年（1772年）誕生した「佐藤一斎」は、坂本龍馬や吉田松陰や勝海舟など幕末の志士の師であった佐久間象山、渡辺崋山、横井小楠、安積艮斎、山田方谷などの師であった。幕末の志士たちに大きな影響を与えたことは間違いない。

佐藤一斎は自身の言葉を「言志四録」としてまとめている。言志四録とは「言志録」（246ヶ条）、「言志後録」（ 255ヶ条）、「言志晩録（ 292ヶ条）」、「言志耋（てつ）録」（ 340ヶ条）の4編のことをいう。

西郷隆盛が生涯持ち歩いた「南洲手抄言志録」は、「言志四録」から101ヶ条を西郷隆盛自身が抜粋したことは有名な話である。

幕末の志士のみならず、現代においても佐藤一斎の言葉は多くの人々に愛され続けている。
2001年春、衆議院本会議で小泉純一郎総理大臣が佐藤一斎の言葉「少くして学べば壮にして為すあり、壮にして学べば老いて衰えず、老いて学べば死して朽ちず」を引用し、注目を集めた。
岸田文雄総理大臣の座右の銘「春風接人」は佐藤一斎の言葉である「以春風接人　以秋霜自粛」（言志後録33）からの引用である。意味は『人には温かくなる春風のように接し、自分には秋の霜の寒く身が引き締まるようになる厳しさで向き合い、慎みを持ちなさい』である。
また、現代においても多くの人が佐藤一斎の言葉に共鳴し、実践していこうとしています。